

陳述書 STATEMENT
ポアリエ ヴィンセント (Poirier, Vincent)

私自身で長女を守っていけるよう、裁判所の調停をお願いいたします。

私は、父親としての自分の権利、母親としての妻、しじまの権利を第一に心配しているのではありません。私の一番の心配は、長女の安寧と幸せです。別居中の妻は、母親としての適正に欠けており、長女は悪い生活環境に置かれていると確信しています。また、少なくとも私が長女の養育を監視しなければ、彼女が何らかの危害を被りかねないと考えています。

私の娘が無防備なまま、妻の発作的な暴力と攻撃的とならず、普通の生活が送れることを確実にしたい、その保証を得られるように、調整をぜひお願いしたい。

ここで私が何もせずに、単に別れてしまった方が、私にとっては好都合かもしれません。そうすれば、私自身の生活も楽になり、金銭的な負担も減り、自分の好きなことだけお金を使えるでしょう。しかし私は、機能障害に陥っている家庭に娘を任せておくことはできません。

私は、完璧な人間ではありませんし、自分が完璧だと主張したこともありません。しかし、最悪の場合でも、私は声を荒げたり、ドアをばたんと閉めたりする程度です。妻、しじまや、妻の父親、妻の前のボーイフレンドとは違い、私が暴力を振るうことはありません。妻よりもずっと上手に自分のストレスに付き合い、処理することができます。2年前に、重度のうつ症状がでました。かなりの期間失業していたので、当然の結果でした。自分の力だけでは、この症状に対処するのが困難になり、誰からの助言も受けずに自発的に専門家の助け（治療）を求めました。その結果、症状はすっかり収まりました。

妻は、自分の問題はアルコールだと頑固に言い張っています。そしてセラピーを受けているとのこと。これは良いことだと思います。しかし妻が受けているセラピーが、表面的な問題の対処だけに留まっているのか、心の深層のもっと重大な問題にまで掘り下げたセラピーを受けているのかを知ることができない状態にあります。

私は素人ですが、妻の本当の問題は、過去に受けた多くのトラウマ、心のキズにあると思います。アルコールは、深層に眠っているトラウマを呼び起こす引き金となり、妻はそれに反応して理不尽で攻撃的になり、しばしば暴力の行使というところまで行ってしまうのだと思います。私も何度か目撃しましたが、新たなストレスを感じた時にも、同様の反応が起ります。昨年3月11日の大震災の後は明らかにこの反応がでました。他にも地下鉄に乗っている時や口論の時にも、同様の症状がでました。このような時、妻は、私と生活しているストレスのせいだと言います。こうした症状（反応）は、確かにストレスが原因だと思いますが、そのストレスの原因が私であるとは考えられません。

妻、しじまは、重度の心理的/精神的な問題を抱えており、それが判断力に影響していると確信しています。妻から聞いている過去の事象を下記に列記します。

- 妻の父親、平沢ハルキは、習慣的に妻と子どもたちを殴っていた。しじまが中学または高校生の時、固形石鹸を入れた靴下で父親に殴られたことが、少なくとも一度あった。この暴力は、しじまが30歳近くになるまで続いたようだ。
- 妻の父親の平沢は、かなり前であるが、長期に渡る不倫関係の愛人がいた。
- しじまの母親も飲酒癖がある。2010年には、酔って道路で酩酊していた母親を通行人が家まで連れてきたことがあった。
- 19歳の時、しじまはレイプされた。当時のボーイフレンドが、しじまに薬をのませ、意識不明になった彼女をレイプし、その後友人を呼んで、その友人もレイプさせた。
- しじま25歳の時、自殺未遂。
- しじまは、最初の結婚中に、激しい身体的な夫婦喧嘩をした。私としじまのどの喧嘩も比べものにならないほどであった。しかしその時、夫がしじまを虐待することはなかった。
- 私と結婚する前に、しじまが付き合っていたアメリカ人のボーイフレンドは、あざが残るまで彼女を殴打した。
- 昨年（2011年）、しじまの姉が新しいアパートに引っ越しした時のこと。手伝いに行ったしじまが、姉が自分の息子に平手打ちをしたのを見た。当時その息子は、2歳に満たなかった。

友人たちが私のことを心配し、妻が出て行った理由を知りたがりました。私は、上記の事実を伝えました。しじまは、私のこの行為を知って私への気持ちが変わり、離婚調停の申立てに至ったと主張しています。この主張について、私は同意できません。しかし、問題は私と妻が合意できないということではありません。問題なのは、妻の判断力の欠如であり、そのような欠陥が、母親としての彼女の資質に多いに影響しているということです。

妻の本当の願望は、両親のいる実家に戻ることです。妻は、自立して一人で生活できるほど成熟していません。妻は、この平成の時代には、母親になったら自分の子供の父親と生活すべきであり、両親と生活すべきでない、ということを理解していません。しじまが私と結婚したのは、身ごもった子供に非嫡出子という汚名を着せたくないという理由だけだったと確信しています。妻は、えみりが生まれて、自分は夫を持ちたくないということに気づいたのです。

一方、私はこの23年間、自分にとっては外国であるこの国で自立して生活してきました。私は、平均よりもずっと良い夫であり、父親であった自信があります。私にも短所や欠点がありますが、しかし、それが別居の正当な理由になるとは信じられません。

乳幼児の世話は、簡単なことです。おむつの取り替え、授乳、お風呂などに、特別な技術は必要ありません。だからこそ、父親や母親たちは、子供が赤ん坊の時が親としてもっとも楽しい

時期だったと懐かしむのです。私の妻も、所定の書式に記入したり、医者健康診断やワクチン接種に行ったりするのは、とても得意です。しかし、それは単なる管理上の役目をこなしているにすぎません。

子育ての本当の挑戦は、子供が歩き出し、言葉をしゃべり出す時に始まります。娘のえみりが、無邪気に笑ったり、微笑んだり、あるいは泣いたり、だっこをせがんだりしているうちは、いろいろな事がまだ単純です。しかし、えみりが成長して、『ダメ!』とか、『やりたくない!』と言い出したらどうなるのでしょうか。えみりが1-2分でもはぐれたら、妻はどんな反応をするのでしょうか。これからの20年、娘にどんなことが起るのでしょうか。デートをして夜遅く帰宅したら、どんな目にあうのでしょうか。掃除したての床に、コップのミルクをこぼしたらどうなるのでしょうか。

赤ん坊は、親に親権を与えるのではなく、親に責務を課すのです。私の妻は、少なくとも、誰かの監督下におかれなければ、心理的、精神的にその責務を全うできる資質を備えていないと確信しています。母親は、自分の夫を信頼しなくてはなりません。しかし、私の妻に、誰かを信頼できる能力があるとは考えられません。私は、素晴らしい父親でしたが、しじまは私を信頼していません。私は、親としての責務を怠ったことはありません。むしろその逆で、親の役目は、たとえ汚れ仕事でも楽しんでやっていました。でも、えみりが少しでも泣くと、妻はえみりを私の腕から引き離すのです。役割をちゃんと果たしている父親を信頼できないというのを、理にかなっていると正当化できるのでしょうか。

妻は、すでに2度もこうした態度を示しました。えみりを1泊預かりたいと2度頼んだのですが、しじまは2回とも私の願いを拒否したのです。妻は、自分がえみりの世話をしていると思っていますが、実際には、えみりから父親を奪い、娘の家庭を破壊したのです。そればかりか、妻は、飲んだくれの祖母と、高齢になったという理由だけで家族を殴ることを止めた祖父を、えみりの本当の父親と家族の代用にしているのです。この人たちは、日本の恥です。

私は、人を信頼できます。これまで2度、しじまの許可を得て、えみりを短時間預かりました。その時に、えみりを返さずに手元に置く事も可能でした。私は、正当な手順を信用することに決めたのです。そして、娘に妻がしたのと同じこと、つまり力づくで母親を奪うようなことはしないと決心しました。妻が私にしたこと、つまり妻から娘を誘拐するような行為はしません。

私の長女、えみりのために、どうか妻の本当の姿を見て下さい。私の妻は、悲惨なほどの情緒不安定な女性で、心に深いキズを負った数々のトラウマに苦しんでいます。彼女は、自分の娘を心の癒しに利用しています。

しかし、私たちの娘は、治療の道具ではありません。娘は人間で、いま受けている状態よりもずっと良好な待遇を受ける価値があります。